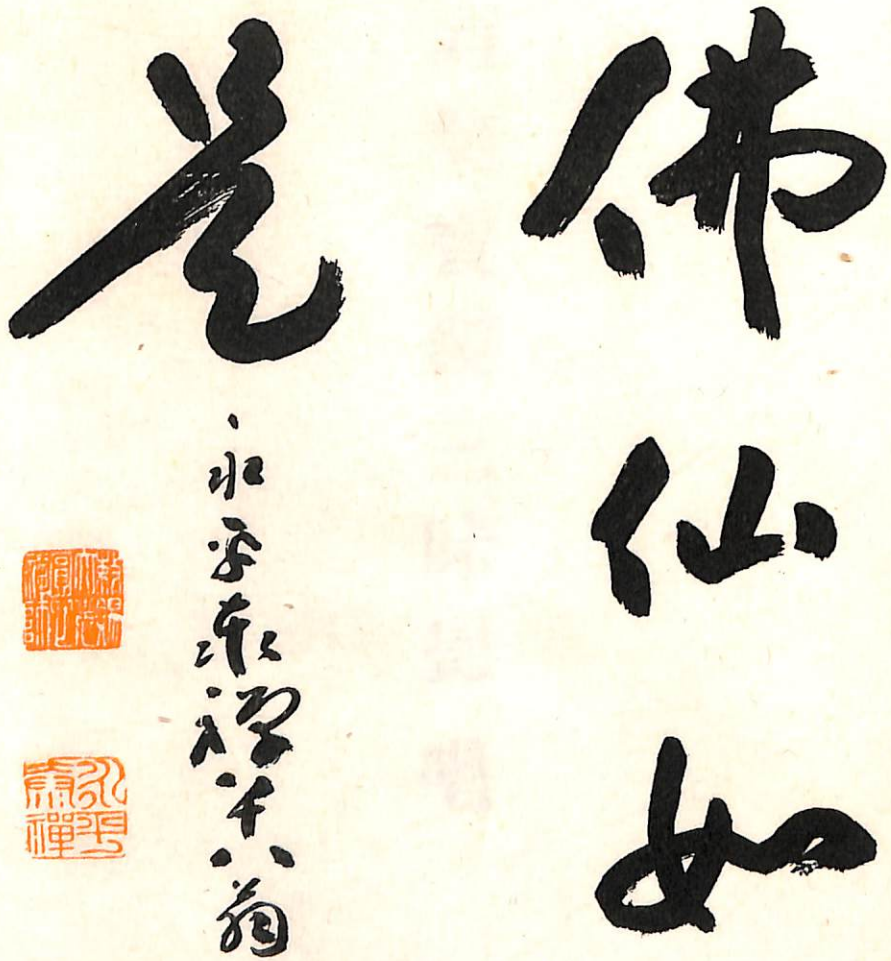
參同契寶鏡三昧提唱

183
サ



御寄贈

著者熊沢禪師

參同契寶鏡三昧提唱

序

老衲、後堂當時、この參同契・寶鏡三昧を、十數回にわたつて、提唱せしことあり。いま、その當時の手鏡を、筐底より發見するに、曲調に應ぜざる點多々あり。よつて、巡錫の餘暇、これが修正補足につとめたり。しかして、このごろ、ようやくその稿を脱するに至れり。もとより、完全無缺にはあらざれども、わが宗としては、日々課誦の古訓であり、時々の法會にも諷誦する歌曲であれば、齊しくその宗旨を心得ておく必要あり。よつて、これをこゝに刊行し、有志の者に頒布することゝせり。

昭和三十五庚子年一月吉日

永平現住　泰禪　識

參同契提唱

本文

竺土大仙、心　東西密ニ相付ス
人根ニ有リ利鈍ニ　道ニ無シ南北、祖ニ
靈源明ニ皎潔タリ　枝派暗ニ流注ス
執スルモテ事元是レ迷　契ウモレ理ニ亦非ラズレ悟ニ
門門一切、境　回互ト不回互ト

回而更相涉　不爾依位住
色本殊質象　聲元異樂苦
暗合上中言　明分清濁句
四大性自復　如子得其母
火熱風動搖　水濕地堅固
眼色耳音聲　鼻香舌鹹酢
然於一一法　依根葉分布
本末須歸宗　尊卑用其語
當明中有暗　勿以暗相遇

當暗中有明　勿以明相覩
明暗各相對　比如前後步
萬物自有功　當言用及處
事存函蓋合　理應箭鋒拄
承言須會宗　勿自立規矩
觸目不會道　運足焉知道
進步非近遠　迷隔山河固
謹白參玄人　光陰莫虛度

參同契

傳灯六祖大鑑慧能大師に、南嶽懐讓、青原行思の二正嗣あり、南嶽の下から、馬祖道一、百丈懐海、黄檗希運、臨濟義玄が相續いて出で、謂ゆる臨濟宗の系統が生れ、青原の下から、石頭希遷、藥山惟儼、雲巖曇晟、洞山良价が相續いて出で、曹洞宗の系統が生れた。今この參同契は、青原下の石頭大師、希遷禪師の述作である

石頭大師が參同契を述作されたことについて、碧巖錄第四十則の圜悟和尚評には「石頭因看肇論至會萬物爲自己處豁然大悟後作一本參同契」とあり、これによると大師は、肇論を讀んではじめて得處ありしごとく聞こえるが、左に非ず、大師は、その師青原行思の膝下で親しく印可を得て、住山の斧鉞を受けられてから、後に肇論を讀み、その論旨の深くわが心境に合致するのを歎ぜられたのである。されば肇論を讀んで大悟して、その後に參同契を述作されたのではない。

參同契という書名は、呉の魏伯陽に參同契という周易を論じた著書があり、その書名を用い来つて名付けられたのだといわれる。勿論、その内容は、洞上の妙旨を述べられたるものであつて、周易の論書としての伯陽の參同契とは、大いにその趣を異にするものである。

參同契一篇の形式は、五言の長篇古詩で、七遇、七奠、六語等の仄韻二十二字を韻脚として推し進められ、全體二百二十字四十四句より成つている。老衲、後堂當時に提唱せしときは、これを、瑯琊の覺和尚の大科四段に基いて提唱せしが、經論の講釋に似て面白からず、よつて今は分科によらず、直ちに提唱することとする。

參同契一篇の内容は、參同契というこの三字に盡くされている。指月老人の不能語にも「參者三也參雜也同契者鎔融涉會之義」とあつて、參とは、無限の參にして

心佛衆生の三、天地人の三である。一二三の三にとゞまらず、物物方圓、數へ來れば、無量無遍千差萬別、花枝自ら長短の三である。同契は、無碍鎔融、春色に高下無きがごとく、平等なるをいう。この參と同契、差別と平等の深意は、不即不離にして、天真にして妙とでもいうべきところである。

題號の説明は、これ位にして、直ちに本文に入いろう。

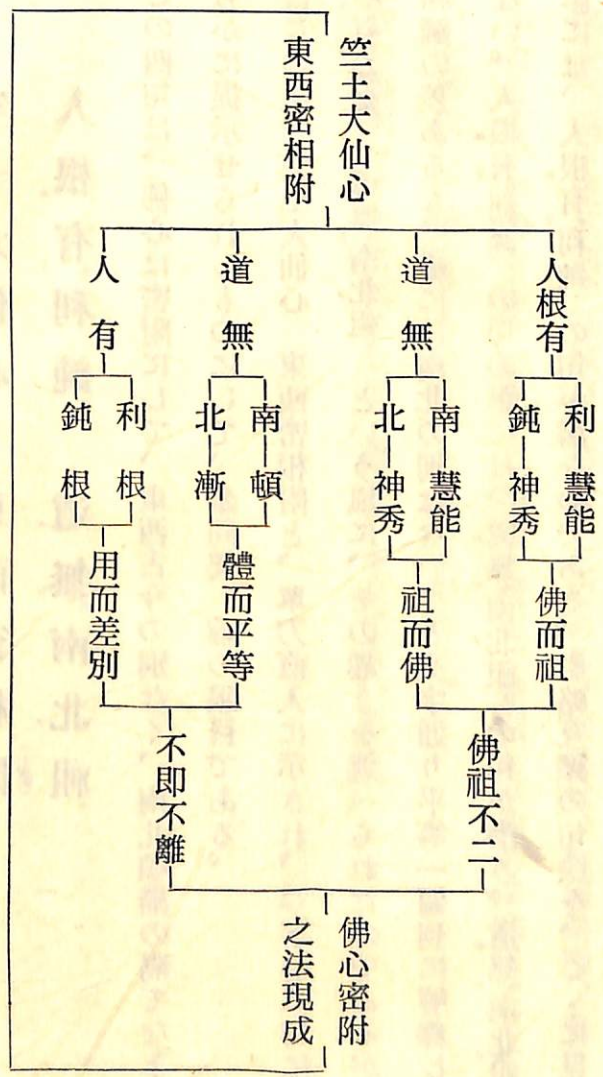
竺土大仙心　東西密相附（七過）

人根有利鈍　道無南北祖（七疊）

この四句は、佛心は密附にして、東西古今の別なく、南北頓漸の隔てなき旨を、明らかに提示せられしものにして、參同契一篇の眼目である。

はじめに、竺土大仙心　東西密相附と、單刀直入に示され、つぎの二句に来て、人根有利鈍　道無南北祖　という風に、その趣きを述べられたのであるが、人には利鈍の差あるも、道には南北の別はない。と文字通り平等一偏到に解釋してはならない。人根有利鈍の句の影には、道無南北祖の句が潜み、道無南北祖の句の影には、人根有利鈍の句が潜むのである。影略互顯の句法を、こゝに見なければならぬ。今圖に示せば、左の通り展轉して、密附顯現佛心現成の理明かなり、こ

の邊の消息大いに參究を要す。



佛心密附の義は、大梵天王問佛決疑經に曰く「梵王金波羅華を靈山會上の佛に献ず、佛は直ちにその花を拈じて衆に示すも、大衆その意を解せず、たゞ獨り迦葉のみあつて破顔微笑す、時に佛は、われに正法眼藏涅槃妙心あり、摩訶迦葉に付囑すと唱えられて、佛心の密附を了らせらる」。この佛心密附の趣きを、高祖大師は廣錄の中で、「春臺夢覺辨花香　黃鳥飛聲亂斷腸　百萬任他空擧首　頭陀直下已知芳」という一偈をもつて賛歎しておられる。

竺土大仙心とは、靈山以來、少林、天童、吉祥と、佛々祖々が密附單傳して今日に至れる、佛心のことである。龍樹祖師の般若灯論にも「菩薩聲聞等も亦仙と名づく、中に於て最尊なるが故に、佛を大仙と名づく」とあるによつて、佛心をいま大仙の心といわれたのである。參同契一篇の句句文文は、すべてこれ竺土大仙の心、すなわち佛心の片々である。

しかして、この大仙の心は、たゞ佛にのみ具せんや、こはこれ吾人の心體である

その心體に、いま大仙の二字を冠したるは、心體は無邊なるが故に大といゝ、その性德は、古今生滅の相に渉らずして、金剛不壞なるが故に仙というのである。

この大仙の心を、西天四七、東土二三、と歷代の祖師が師資面授し、證契即通し來たれる端的を、こゝに密附という。密附とは、不能語にも、「秘密深秘の議論として、險隘の中に驅馳すること莫れ」とあるように、隱密秘密の謂にあらずして、東西古今の隔てなく、柳は綠花は紅という、親密綿密の義である。

なを、人根有利鈍、道無南北祖、の二について、不能語にも、「此二句尅當時裂衣南北隨補衲之密意也」とあり、道本圓通の的意を知らずして、南頓北漸の一方に執する俗弊を救うの深意が、この二句に含まれているわけ。學人の機根には本来無一物の利根もあれば、時々に勤めて拂拭する底の鈍根もあるわけで、人々分上には差別ありとするも、道の本源より見來るときは、南能は利根の祖、北秀は鈍根の祖という區別は立たぬ。宜しく實參實究すべきである。

靈源明皓潔　支派暗流注（七遍）
執事元是迷　契理亦非悟（七遍）

前の大仙の心が、こゝに靈源となつて現れて來た。靈源は言うまでもなく、濁りなく皓潔として明らかなるもの、真如凝然じや。支派は、唐の宣宗が「谿間豈能留得住　終歸大海作波濤」と、香嚴の詩に續けしごとく、巖に觸れ石に激して、常に一定住處に止まらず、遂に流れ流れて、千波萬浪大海となるあの水のように、變現窮りなき諸法を指す、暗に流注すとは、諸法の變現窮りなきをいうのである。

續いてこれを、理事迷悟に分けて參究するに、理は本體靈源であり、事は妙用支派である。本體妙用は、一有多種二無兩般、で、もとより分ち難く、不即不離で

ある。體を擧するときは、體のみあつて用を見ず、用を揚ぐるときは、用のみあつて體を見ず、いま理事においてもまた然りである。然るに理事の兩邊に屈託していては、大仙の心體上に、染汚なるが故に、遂に大丈夫の鐵漢とは申せぬ。そこのところを、執事元是迷、契理亦非悟と一喝されたのである。

門々一切境　回互不回互（七遍）
回而更相涉　不爾依位住（七遍）

この四句は、上の靈源と支派の自在の德を說くので、門とは、眼耳鼻舌身意の六根門なるが故に、門々と重ねていゝ、境とは、色聲香味觸法の六塵境にして、百千萬境と分かれるが故に、一切境という。

根と境は、回互にして平等となるときもあり、不回互にして差別となるときもある。回互のときは、心佛衆生是三無差別にして、回して更に相涉るであり、不回互のときは、佛界衆生界各々自位を昧さざるところにして、位に依つて住すである。不回互のとき、天上天下唯我獨尊とも、自己の光明天地を照すともいえるのであるが、しかし不回互の一方を信じて有頂天になると、禪天魔を逸れぬこととなるからこゝはしつかり坐り込まなければならぬ。修せざるには現はれず、證せざるには得ることなしであり、修證不二の心境に達する必要がある。

なお、門々一切境を、門とは盡法界大解脫門、境とは森羅萬象無碍自在の境、という風にいゝ、一切諸法、廓然として通達無碍なるが故に、支派暗に流注する差別の妙用が、そのまゝ靈源明に皓潔たる平等の本體なりと說き、回互にして本體に歸するも不回互にして妙用を現するも、畢竟大仙の心の性德に外ならざるなりと明すこともある。門々一切境をこのように、解脫門自在境と說くも、前にいつたように

六根門六塵境と説くも二義共に存して可ならん、しかしつぎの色聲の句を呼び起すには、六根六境の説よろしからん。

色元殊質像　聲本異樂苦（七遇）

暗合上中質　明分清濁句（七遇）

この四句は、門々一切境の中の、色聲の二を將ち來つて、回互不回互の義を、詳説されるのである。色聲の二を擧げて、香味等の四を擧げざるは、後の眼色云々の箇所に用うべく、いまは殘されたのである。

色は、長短方円等の形影を有するもの故、色元殊質像といわれ、聲は、可意聲と不可意聲の別ありて、苦樂等の意識に關するもの故、聲本異樂苦と述べられたのである。二句共に、その位を守つて昧さざる旨を、明かされたのである。

暗は上中の質に合い、明は清濁の句を分つ、上中の質も、清濁の句も、共に差したる意味はない。是非、得失、新舊、寒暑というも、また得たりじや、畢竟、源派無碍大仙の心の變現に外ならぬ。回互するときは、一毛頭に法王刹を現じ、一微塵裏に大法輪を轉ずる等、回互宛轉無碍自在なり。そこをいま暗は上中の質に合いと示された。不回互のときは、天は東南と高く、地は西北と低く、さの他、大小、方圓、苦樂、昇沈等、諸法は歴然として自位を守つて分明なり。そこをまた明は清濁の句を分ち、と示されたのである。暗明の二句、共に色聲の前二句を承けて、回互不回互の旨を明かされしものである。

四大性自復　如子得其母（二十五有）（七遇）

火熱風動搖　水潤地堅固

この四大性自復の句より、後に述べる依根葉分布の句まで八句は、不回互を明かされしものである。その中に就いて、この四句は、四大の自位に歸するを明かされしもの、自の一字に着眼を要す。物として自位の本體に歸着せずということはないのである。

四大性というのは、地水火風の堅濕煖動にして、吾人の依身をはじめ、萬物一として、この四大和合の身に依らざるはない。故にそのことをこゝに引例して、天真無作の妙行もまた然りと示されたのである。

如子得其母　というのは、他國に跨跰していた長者の子が、長者の家に歸復せる如く、また、見捨てられていた萬金の茶釜が、立派にその價値を見出されしごとき樣子をいうのである。歸復せし後も、歸復せざりし前も、長者の子たることには變りはなく、見出されし後も、見出さざれし前も、萬金の茶釜であることには異りがない。そのところを、四大性自復と示されたのである。父といはず、母といゝしところ、一段の趣きのあることも見落してはならぬ。

火の熱するのも、風の動搖するのも、水の潤うのも、地の堅固なるのも、みな火は火として、火の自性に歸復して火の働きをなし、水は水として、水の自性に歸復して水の働きをなすのである。そこを火は熱し、風は動搖、乃至、水は潤い、地は堅固と示されたのである。

眼色耳音聲　鼻香舌鹹酢（七通）

然於一一法　依根葉分布（七通）

本末須皈宗　尊卑用其語（六通）

はじめの四句の葉分布までは、前に引續き不回互を明かされたのである。六根の中の眼耳鼻舌の四と、六境の中の色聲香味の四とを擧げ來つて、各々自位を守つて本體を昧さず、根境一々の諸法が、その物その物として、根に依つて葉分布と活動しているところは、實に天真而妙といわざるを得ぬ、とまづ不回互の義を述べられ、その不回互の義をさらに結んで、諸法住位のそのまま源派一如、本末一致にして餘物なく、齊しく自らの究意の宗に歸復すると示されしなり。行いては到る水の窮る處、坐しては看る雲の起る時、という究竟の宗旨である。

曾つて老衲五十前後の頃、西江州石庭の圓通山正眼院の江湖會に、助化として常詰いたせしことあり、この寺は琵琶湖畔に在り、風光絶佳の境地なり、依つて左の五言律が浮んだ。

眼下三千界　風煙望不窮

鳥啼禪刹靜　花發野村紅

山媚描濃黛　水明連碧空

太湖分八景　總是入圓通

富士山と共に詠ぜられている琵琶湖の周邊には、比良の暮雪、石山の秋月等八景ありて絶賞せられているが、その八景も悉く一箇の円通山に歸入せり。というのがこの五言律の詩意である。

いまこの歸宗の語もまた然り、根葉、本末と分かれているが、歸するところは一致である。大仙の心の外ではないのである。この歸宗の語こそ、謂ゆる如語、實語如來語にして、誰か遵用せざらんや、かるが故に、尊卑用其語と結ばれたのである。

指月老人は、これを獅子不欺之力と註せられた。獅子は、象を捉うるときも兎

を捉うるときも、全力を盡して自らの力を欺かないのである。象や兎を捉えんとして、威を振うばかりではない。柳の緑、花の紅い、またこれ獅子不欺之力である。左に擧げた一偈は、老衲新春の獅子不欺の力である。獅子不欺之力、何事もこれでなくては成功せぬ。

獅子不欺力　一花開一春

與時心境合　梅屋讀書新

當明中有暗　勿以暗相遇（七過）

當暗中有明　勿以明相覩（七虞）

明暗各相對　比如前後歩（七遇）

この六句は、上の色元殊質像のところの暗合明分の二句を承け來つて、不回互の中に回互ありて、互の中に不回互ありて、明暗、回不回ともにこれ一虛空なる旨を明すのであつて、はじめの當明中有暗　勿以暗相遇の二句は、明、不回互の當體が、そつくりそのまま暗、すなわち回互なれども、暗を外より持ち來つて明と並べ見るのではない。明中全明にして、しかも暗相なのである。不回互の明相を離れぬ、回互の暗相というわけて、定相がないのである。暗の一をもつて待遇させてはならぬ。

つぎの當暗中有明　勿以明相覩の句は、暗回互の當體が、そつくりそのまゝ明不回互なれども、明を外より持ち來つて、暗と並べ見るのではない。暗中全暗にして、しかも明相なり、回互の暗相を離れぬ不回互の明相にして、これまた定相なきがゆえに、明相の一をもつて相い覩てはならぬ。こゝは明中に暗が入り込み、明

中に明が入り込んで、見さかえがつかない。實に深甚である。そこのところを下の二句に示して、明暗各相對　比如前後步と顯されたのである。明暗相對しておれども、比するに前後の步みのごとくであつて、二にして一、一にして二、前步後步寄り合い、前步のおかげで、後步があらわれ、後步のおかげで、前步があらわれてくる、相即相入の妙義にして、參同契の宗義も、こゝに来て顯わるというべきてある。回互といつても、こねまぜたる意にはあらざるなり。

萬物自有功　當言用及處（六語）

事存函蓋合　理應箭鋒拄（七語）

この四句は、上の明暗たがいに功用を有する句を承け來つて、さらに萬物すべて功用あることを明かして、最初の事を執するも、もとこれ迷い、理に契うもまた悟にあらず、の意を結ばるゝなり。しかして上の二句で、差別の義を述べ、下の二句で、無差別の意を述べられるのである。

第一句の萬物自有功とは、物として天真の功勲なきはなく　四時を運ぶは天の功五穀を成すは地の功、男は耕をもつて功となし、女は織をもつて功となす。四時の用は寒暖を調うの功あり、五穀の用は人を救う功あり、しかして、この功用たるや甲の功用は、乙の功用にあらず、乙の功用は、甲の功用にあらず、長者長法身、短者短法身にして、各々その功用あり。然し、その功勲たるや、用の極まる處を得ざればあらわれず、故に第二句に來て、當言用及處と示されたのである。

賢人君子も、その時と處とを得ざれば、功勲をあらわすことができず、不遇に終る。その例は古より澤山ある。しかして、及の字は極の義にして、火は乾につき、水は濕につき、各々その位に住して功用を顯するのである。今日吾人が佛祖單傳の

三昧に安住する正當、直ちに心佛及衆生是三無差別の境涯となつて顯現するのである、しかれば、用の極わまる處は前にして、功勲は後という風に、前後の區別が立つかというに、しからず。事の處に理が存し、理の處に事が應じて、こゝはあくまでも事理円融一枚にして、同契貫通なのである。その樣子を下二句に示され、函小なれば蓋も小に、函大れば蓋もまた大なる道理と、飛衛と紀昌が弓の名人、たがいにその術を極めて矢を射たところ、中路において矢と矢相觸れて大地に墜ちたという故事とを引用して、事存理應の趣きを、函蓋合し箭鋒相拄う、と巧妙に述べられたのである。

この萬物自有功の一節について、こゝに一偈を賦して學佛者の參考に供する。

萬物生生力　明明樹大功
事存理應處　春苑百花紅

萬物すべて光輝發育明歷々、おのづから大功を樹つる力を具備しているも、その力を施す場所を得なければ、その力は顯われぬ。横綱や大關がいかに力があつても、その力を伸べる、國技館がなくては、事理相應じてその力を發揮することはできぬこの一彈指も、事理相應ずるとき一聲を放つのである。この一聲小なりといえども響き三千界に徹す。實にこれ大功なるにあらずや。萬物生生、事存理應、一陽來復のとき、春苑百花紅いにして、萬國おのづから芳香新なり。あに大功にあらざらんや

指月老人もこの一節について、事不契理能應焉衆生如拄彌勒如合同契之宗始終一貫今誰言功用金翅劈海捉獲獰龍と力を入れて註せられている。參同契一篇の眼目なり、老衲の一偈を併せ用いて、實參實究せられたい。

承言須會宗　勿自立規矩（七憂）

この二句は、前を承け後を起す至極の要點にして、この十字もつとも大切なり。はじめに、東西密附、靈源皓潔などと拈じ來る底、ことごとくこれ天空の月を示すの指頭である。のみならず、如來五千餘巻の經文、歴祖一千七百の公案、その他すべての言句文字は信ずべくして、信ずべからず、執すべくして執すべからず、不立文字、教化別傳というも、また然なり。この意を指月老人は不能語に、西祖未だ不立文字の妖妄を言わず、暗者はこれを知らずして、西來の題目と思う。佛法元教内の窟宅なし、祖師何ぞ教外の小徑に走らんや、縱い内外會通というも、猶を殼に滞るなり。と註されている。この邊大いに參究を要す。

從來、二と說き三と說き、長と示し短と示すも、ことごとくこれ學佛者をして、大仙の心を認得せしめんがための指示に過ぎざるなり、情識分別の方規円矩の自分推量では、佛祖の堂奥には體達し難し。との意をいまこの二句にて結ばれたのである。

る。

觸目不会道　運足焉知路（七遇）

進歩非近遠　迷隔山河固（七遇）

この四句は、參玄の人の心操、行持の心構えを示す流通の要點なり。觸目不會道の一句につき、豫めいうて置きたいことは、參玄の人としては、大道を體解し認得することが大事である。大道とは、佛教の極意にして、那邊に存するかというに處々心、處々現、平常心是れ道といわれるように、平常の行住坐臥ことごとくこれ道ならざるはないのである。しかしてこの道中に在っては、染汚は許されない。その様子を指月老人は、呵々、泥佛衣を攘げて水を渡り來る。というている。なんとおかしいじゃないか、水の中に入ればとろけてしまう泥佛、情識を持たない泥で作

つた佛さまが、水を渡つて來るとは。知解分別を離れた無碍自在の功用をいうに外ならない。この功用は那邊より來るか、これすなわち大仙の心の觸目自在の働きにして、平常心是道の端的なり。わが高祖大師のお示しにも、卽心是佛というは、誰というぞ、審細に參究すへし。とある。お互い奪起一番、實參實究しなければならぬところじや。

大道は決して遠くにあらず、人々の脚下にあるのである。しかるに、觸目道を會せずして、外に向つて大道を求めば、山に登つて魚を漁り、海に入つて蓬を採らんとするがごとく、愚もまた甚だしい。足を運び、歩を進めるも、ことごとく徒勞に歸し、迷つて山河の險固を隔て、大仙の心は、何れの雲にか鎖されて、たとい驢年に至るも、解脫の心地には遠して遠しじや。こゝにおいてか、大道を脚下に見ば運足進歩の前後歩行の卽處、大光明を放ち、隔つ山河の卽今、直下に大仙の心の清淨身、現成公案なることを認得できるのである。回向返照して、大いに參究を要す。

謹白參玄人　光陰莫虛度（七週）

この二句は、參同契一篇、石頭大師の親言親句の總結なり。謹んで白す、の二字まことに有難い。わが高祖大師も、上堂示衆のときに、卽今奉告諸兄弟　といわれている。先聖後聖その心全く一つである。

參玄の人とは、いかなる人か、光陰を虛しく度らざる人こそ、眞に參玄人である。古人多くは佛祖の淨域に在つて、佛祖の心を心とし、佛祖の大道を心修し來たる。今人これに反するは何ぞや。われ八十八歲にして、いまその非を知り、慚愧に堪えざるものあり。

光陰莫虛度　この一句につき、淨祖の師、雪竇和尚曰く、誠哉是言也、と、また

指月老人の曰、今日如何、唯　と、唯とはハイという應諾の語である。昭和の今日永平高祖の法孫、以て如何と爲す。光陰虚しく度るか、度らざるか、至囑々々

寶鏡三昧提唱

本文

如是之法　佛祖密附
汝今得之　宜能保護
銀盌盛雪　明月藏鷺
類之不齊　混則知處
意不在言　來機亦趣

動成窠臼　差落顧佇
背觸俱非　如大火聚
但形文彩　即屬染汚
夜半正明　天曉不露
爲物作則　用拔諸苦
雖非有爲　不是無語
如臨寶鏡　形影相覩
汝不是渠　渠正是汝
如世嬰児　五相完具

不去不來　不起不住
婆婆唧唧　有句無句
終不得物　語未正故
重離六爻　偏正回互
疊而爲三　變盡爲五
如荃草味　如金剛杵
正中妙挾　敲唱雙擧
通宗通塗　挾帶挾路
錯然則吉　不可犯忤

天眞而妙　不屬迷悟
因緣時節　寂然照著
細入無間　大絶方所
毫忽之差　不應律呂
今有頓漸　緣立宗趣
宗趣分矣　即是規矩
宗通趣極　眞常流注
外寂內搖　繫駒伏鼠
先聖悲之　爲法檀度

隨其顚倒　以緇爲素
顚倒想滅　肯心自許
要合古轍　請觀前古
佛道垂成　十劫觀樹
如虎之缺　如馬之羼
以有下劣　寶几珍御
以有驚異　狸奴白牯
羿以巧力　射中百步
箭鋒相値　巧力何預

木人方歌　石女起舞
非情識到　寧容思慮
臣奉於君　子順於父
不順非孝　不奉不輔
潛行密用　如愚如愚
但能相續　名主中主

寶鏡三昧

寶鏡三昧一篇は、七遇、七麤、六語、六御などの韻をもつて成る。四言九十四句、三百六十六字の歌曲である。實によく洞上綿密の宗旨を宣揚したるものにして、悟道の深奥は、この寶鏡三昧にありというも、過言ではない。

ところで、この寶鏡三昧の作者については、古來異說あり。會元十三には、雲巖より洞山に、洞山より曹山に密授すとある。その文に曰く洞山囑曹山曰吾在雲巖先師處親印寶鏡三昧事窮的要今付汝云々。また僧寶傳には、さらに溯つて、藥山の作ならんという。その文に曰く、寶鏡三昧者其詞要妙雲巖授洞山疑藥山所作也先德懼屬流布多珍秘之云々。天桂老人の報恩編は、この說に順うて、藥山の作なることを主張せり。されど、これらの說信ずべからず。この寶鏡三昧は、洞山大

師の作なること疑うべからず。その所以いかんとなれば、千丈實巖老人の杓卜篇にも、洞山大師の謂ゆる、吾れ雲巖先師より、親しく寶鏡三昧を印せらることを得とは、これ西天東地佛祖正傳の寶鏡三昧を印證せらるとの意味にして、この三昧保護の旨を、洞山大師が、この一篇に著わされたるものなり。例えば、正法眼藏とは、靈山附屬の妙心なりと雖も、わが高祖大師は、これを一部の書名となされし如し。とあるように、寶鏡三昧を印せらるとあるも、それは一篇の書を授かつたる意にはあらず。また月舟和尚の薫蕕談には、洞山大師過水の偈と、本文の如臨寶鏡形影相覩汝是非渠渠正是汝といえる文體と同一なり、とある。これによつて考えるも、この寶鏡三昧一篇は、洞山大師の述作なること明かなり。題號の下に、著者の名を記さずと雖も、彼此論ずるは、活眼に乏しければなり。仰いで洞山大師の眞作なりと信すべし。洞山大師、名は良价、會稽の人なり。はじめ五洩山の禮默禪師

について得度し、二十一歳のとき具足戒を受けしより、南泉の普願、溈山の靈祐等、當時の名匠について參學し、後傳灯三十七世雲巖曇晟大和尚の室に入つて嗣法せらる。洞山大師の大悟について、世人多く過水の偈をもつて、悟道の偈といゝ、類聚などにも、大悟の偈とあるも、然らず。洞山大師は、無情の說法、有情聞く、の商量の下に大悟し、也太奇々々々の一偈を呈し、雲巖禪師より印可を得て、傳灯三十八代の祖位を承けられたのである。唐の宣宗皇帝大中の末、新豊山において大いに禪風を吹唱し、後、豫章の洞山に住し、曹山、雲居などのの英傑を得て、盛んに化門を開かる。こゝにおいてか、洞上綿密の宗風天下に遍し。唐の咸通十年三月八日遷化せらる。壽六十三、法臘四十二歳、懿宗皇帝その德を追崇して、悟本大師の諡號を賜う、塔を建てゝ慈覺と稱す、因みに、六魚の韻を用いて作られし、洞山大師の過水の偈を、こゝに記す。

切忌從他覓　迢迢與我疎
我今獨自往　處處得逢渠
渠今正是我　我今不是渠
應須恁麼會　方得契如如

この過水の偈の要點を申せば、本具の佛心は、人々具足個々圓成にして、缺目がない。こゝに氣がつかぬから、迢々として、我と遠ざかつて、佛心を取り失うこととなる。我いま獨り自ら水を渡つて、實に獨立無伴じや、もとより形のあるところには、必ず影があり、形と影とは離るべからず、處々渠に契うて、前佛あり、後佛あり、前後相續して、間斷あることなし。かくのごとく前後無間斷なり雖も、渠の影と、我の影と確立しているのではない。無差別平等、回互宛轉にして、實に春色無高下である。この意が、渠今正是我の句意である。といつても然しまた、それに執

着してはならぬ。差別不回互にして、花枝自短長と現成するときも、見なければならぬ。そこが我今不是渠じや。恁麼に心得及して、方に如々心源の寶鏡面に契う、これが大丈夫の鐵漢というべきである。

さて、この寶鏡三昧、一本には、三昧の下に歌の字がある。肥後の菊地郡熊耳山正覺寺に秘藏せる朝鮮本がそれである。なを、面山老人の吹唱、その他纂解なども歌の字を加えている。もとより洞山大師にも、佛祖密附の三昧を歌に詠じて、これを朝野に施し、眞俗の者をして、その大道に證入せしんめとする思召しありとすれば、歌の字あるも佳ならん。しかし、佛祖眞前などにおいて、これを讀誦する誦經用としは、むしろ歌の字を加えぬ方がよろしく、よつていまは除くこゝとせり。

寶鏡とは、最尊最重なる鏡ということである。吾人本具の佛心は、無相不昧の大圓鏡智にして取捨憎愛の見を離れ、一切の物に應じて私なく、胡漢照鑑、無差の妙

心であることを、いま鏡に譬えたわけである。つまり本具の佛心そのものを、寶鏡三昧と拈提し來たれるなり。面山老人の吹唱には、鏡を打破し來れ、とある。有相の鏡に執せず、直に本具の佛心を體得せしむる婆心である。三昧とは、梵語、こゝに等持という。要するに、そのものに成り切ることにして、盡法界、並びに擧足下足、寶鏡の一枚なり、という意を三昧というのである。不染汚の大寶鏡、知らんと欲せば、直下に知るべし。山僧、こゝに一偈を打す。

本是淨明無點塵　大圓日夜放光新
鏡前妙用君知否　形影如如來現親

如是之法　佛祖密附（七遍）
汝今得之　宜能保護（七遍）

この四句は、佛祖面々、正法附囑の大綱にして、寶鏡三昧一篇の關鑰もまたこゝにあり。如是とは、佛が阿難に勅して經の首めに置かしめられし語なれども、いまこゝには、一篇の法體、すなわち、人々本具の佛心を指すのである。參同契の謂ゆる大仙の心と同じである。

佛祖密附、汝今得之とは、如是の妙心、本具の佛心を、世尊は迦葉に附囑し、迦葉は阿難に傳えて、展轉相續し、洞山は雲居、曹山等に傳え、乃至、今日に至り、師資の二面裂破して、中に影像なく、心々相通じて、一面の大寶鏡なることを、示されるので、汝とは、概して機に對する語にして、證道歌の謂ゆる君不見の君と同じである。一說に、この汝を、洞山より曹山を指す。とあるも、これは誤れり。強ち曹山に限りたるにはあらず、人々箇々汝にあらずということはない。

宜能保護とは、叮寧の辭なり。よくこの一篇の歌曲の言句を保護せよ、という

意にあらず、前佛も如是、後佛も如是、わが高祖大師の謂ゆる空手還レ鄕所以一毫無二佛法一のお示しのごとく、たゞこの不染汚の境涯、これをこれ保護というのである。しかして、この密附保護の的意を、さらに下の銀盌云々と述べられるのである。

銀盌盛レ雪明月藏レ鷺（七遇）
類而不レ齊（六韻）混則知レ處（六韻）

この四句は、佛祖密附の如是法を、保護する趣きを示さるところなり。すなわち、師資一枚にして、しかも各々その位を味さゞることを知らしむるのである。上の二句は、譬えをもつて、平等の體を明かし、下の二句は、その義を述べて、差別の用を明かすのである。

銀盌と白雪、明月と白鷺、實にこれ同一色にして、この間さらに差別の見るべきなし。これを布延すれば、たゞこの四種のみにあらず、森羅萬象、天地同根、心佛及衆生、春色無高下のごとく、無差別なり、これしばらく體について示すのである。しかれども、類して齊しからず、銀盌は白雪にあらず、明月あに白鷺ならんや、師資の関係においても、また然りである。類して、しかも齊しからず。混じて、しかも處を知つて、各々自位を味まさず、これは用についていうなり。かくのごとく、同中に異あり。異中に同ありて、全く體と用は、不卽（差別）不離（平等）なり、という旨を明かされるのである。

意不レ在レ言來機亦赴（七遇）
動成レ窠臼差落顧佇（六韻）

前段においては、借事門より師資密附保護の様子を説かれたのであるが、いまま

た師資相見における心得を示したまうなり。

上二句の大要は、佛々祖々密附密傳の如是法は、言語をもつて得べきものにあらず。思慮をもつて議すべきものにあらず、意は窮通無碍にして、言は必ず局る、いま限りある言をもつて、限りなきの意をあらわすことは、容易でない。さればとて、捨て置くべきにあらず、師家は、學人の來り參ずるとき、眉毛を惜まず、無舌の言語をもつて、機に應じて、赴き導くなり。喩えば、佛と問うて來れば、麻三斤と答うるも、麻三斤には用事なし。己我の舊見を放擲して、擬疑に渡らず、直ちに、言外無限の意を會得して、如是法に體達せしむるのが、師家と學人相見の骨髄である。いよいよその地に到り得ば、言と意と不二の故に、有というて有に墮せず、無というて無に落ちず、終日說いて口に過なく、圓轉無碍なり、言語道斷とは、一切の言語なり、とは、このことをいうのである。

下二句は、如是法の全體は、もとより動轉迷悟の對待はないが、文字言句に執着して、佛見、法見、己見の舊見を起し、それに動着し、差別の見を生じて、言句を追い廻せば、遂に窠臼顧佇といわれる情識分別の穴に落ちこんで、無碍自在なる如是法と成り行くことができなくなる。という旨を示されたものである。窠臼とは、鳥の巣の、樹に在るを巣といゝ、穴を堀つて臼のごときを窠というによる。顧佇とは躊躇疑惑の義にして、自由無碍なる能はざるをいうなり。參同契の謂ゆる承言須會宗云々の語を體得すれば、自ら明了である。

背觸共非如大火聚（七遍）
但形文彩即屬染汚（七遍）

この四句は、如是法の絶對にして、不染汚なることを、大火聚にたとえて明かさ

れたのである。

はじめの二句は、佛祖相承の如是法は、大火の熾然たるがごとく、これに背くときは、當體火を失して自由を得ず、觸れるときは、手足眉毛を燒かれて、これまた自由を得ず、という意である。いまこれを、法についていわば、吾人は凡夫なりとて、佛祖に背き遠ざかれば、迷に入りて、山河の固を隔つに至り、もしまた佛祖を求めて、これに觸れ近づくときは、慣れ逢う者かえつて親しからずで、これまた病を免れず。かくのごとく、背觸に渉つていて、翻身自由の分なくば、萬劫千生解脫の期あることなし。

下の二句は、その背觸に隨せざる大火聚に向つて、たとえわづかでも、有と說き、無と說き、不識というとも、揚眉をなすも、ことごとくこれ染汚なるべし。と示されたのである。作麼生かこれ不染汚の如是法、老衲こゝに一偈あり。

欲窮如是法　法法不容私
公案現成處　洞深雲出遲

夜半正明　天曉不露（七遍）

この二句は、參同契の明中に暗あり、暗中に明ありの意を述べて來つて、人々具足の實鏡は、大火聚の背觸に渉らざるがごとく、不染汚なりと指示せられたものである。すなわち、これ正偏回互の樞機である。夜半と不露とは、混然として彩色を分たず、これ正位なり。正明と天曉とは、玲瓏として明白なり、これ偏位である。凡夫思慮より考えれば、夜半は不露にして、天曉は正明なりと思えども、いま佛祖至極の法門より見來れば、夜半かとすれば正明なり、天曉かとすれば不露なり、である。

これを日本國についていえば、君主國家の正位夜半かとすれば、民主政體の偏位正明である。またこれを父子についていえば、子の偏位天曉が、直に父の正位不露である。かくのごとくにして、君民道合し、父子相い親しむところ、直ちにこれ正偏回互無罣碍の往來である。

爲物作則　用拔諸苦（七處）
雖非有爲　不是無語（六問）

この四句は、上の正偏回互の二句を承け來つて、正位の本體より偏位の作用を起し、爲人のための法則となりて染汚の諸苦を拔く、權化門を明かされたものである。

寶鏡の本體は、名相の得べきもないから、したがつてまた有無の言詮に落ちず、その本體を守つて、たゞ向上一邊に止まれば、下化衆生の分を缺く、このゆえに學人の機類に應じて、有無情識等の苦患を拔いて、本分の域に達せしめんとするなり

いまその學人をして、本分の域に達せしむるの妙用は、全くこれ有爲の言語にあらざれども、語なきにはあらざるなり。法はもとより定相なきがゆえに、あるときは緇をもつて素となし、あるときは、有を說いて無となす、みなこれ機を導くの權方便に過ぎないのである。

如是法の大火聚は、正位の上より見來るときは、もちろん、有爲造作を離れたる法體なれども、しばらく有無長短の語言三昧に入り、よく法の檀度となりて、如是寶鏡の甚深微妙なるを顯す、というのが下二句の意であり、無語という糸口より、つぎの如臨寶鏡云々の句を呼び出すのである。

如臨寶鏡　形影相覩（七處）（六問）
汝是非渠　渠正是汝

人の機類に應じて、有無情識等の苦患を拔いて、本分の域に達せしめんとするなり

いまその學人をして、本分の域に達せしむるの妙用は、全くこれ有爲の言語にあらざれども、語なきにはあらざるなり。法はもとより定相なきがゆえに、あるときは緇をもつて素となし、あるときは、有を說いて無となす、みなこれ機を導くの權方便に過ぎないのである。

如是法の大火聚は、正位の上より見來るときは、もちろん、有爲造作を離れたる法體なれども、しばらく有無長短の語言三昧に入り、よく法の檀度となりて、如是寶鏡の甚深微妙なるを顯す、というのが下二句の意であり、無語という糸口より、つぎの如臨寶鏡云々の句を呼び出すのである。

如臨寶鏡　形影相覩（七曇）

汝是非渠　渠正是汝（六語）

この四句は、上の、有爲にあらずといえども、これ語なきにあらず、という文を、さらに述べ來つて、寶鏡の心境一如にして、染汚なき旨を辨ぜられたのである

如臨寶鏡とあるから、譬えかと思うと、そうではない。心してよく看なければならぬ。汝とは、形にして、渠とは、影である。いま吾人が、寶鏡に臨んで、形影相覩るとせんか、形はこれ形にして影にあらず、影もまた影にして形にあらず、この樣子を、汝是非渠といわれ、正偏の二位、各々自位に住して、法體を昧まさず、偏位と正位と回互せず、不回互なる旨を明かされたのである。

つぎに、その影は、形の影にして、影獨り存するにはあらず、必ず形を待つて影はあるなり。この樣子を、渠正是汝といわれ、正偏回互宛轉の旨を明かされしなり。しかして、この人々具足の如是寶鏡をもつて照鑑するときは、たゞ單に形影のみにあらず、三世諸佛も、一切衆生も、乃至、大地草木ことごとくこの大寶鏡中の所現にあらざるはなし、見來れば、寶鏡を離れて、さらに萬像の見るべきなく、反對にまた、萬像を現さゞるの寶鏡はないのである。實に寶鏡と萬像とは、一にあらず、異にあらず、離にあらず、合にあらず、まことに無障無碍のものである。この歌曲一篇を、寶鏡三昧と題することは、正にこれこの四句に基くものであり。過水の偈と同時に、實參實究すべきところである。

如世嬰児　五相完具（七遇）
不去不來　不起不住（七遇）
婆婆唎唎　有句無句（七遇）
終不得物　語末正故（七遇）

この一段は、大涅槃經の如來の嬰兒行を引用して、物の爲めに則となる寶鏡の妙

用を、明かされるのである。世の嬰兒は、去來起住語の五相を具足するも、少しも定相をとゞめず。如來もまた然りで、五相を完具すれども、衆生の機類次第にして一定の規律なく、接化無方にして、八萬四千の煩惱には、八萬四千の法門ありて、應機接物自在なり、これを如來の嬰兒行というのである。たゞに如來のみならんや、今日人々の上におけるも、また然り、一去一來、ことごとくこれ、寶鏡面にして、解脫の五相ならざるはないのである。

重離六爻　偏正回互（七遇）
疊而成三　變盡爲五（七變）

この一段は、一卦に五卦を具し、五卦に一卦を具して、一中に五あり、五中に一あり、相離れざる、易の道理を用い來て、佛の爲人度生も、衆生の機類に應じて、接化窮りなく、萬別千差なりといえども、齊くこれ、大寶鏡の所現にして、正偏回互不可說、不可稱量なるを、明かされたのである。

疊んで三と成りとは、離兌巽の三にして、變じ盡きて五と爲るとは、離兌巽の三に澤風大過と風澤中孚の二を加えての五なり。根本の離の三爻を、疊み疊みして五變すると五卦となる。すなわち、離の三爻の卦☲　この離と離とを合したる場合、これを離の六爻の卦䷝という。離の六爻において、一を二に疊み、三を四に疊み、五を六に疊めば、兌の三爻の卦☱を得る。巽の三爻の卦☴　自らその下にあり。こゝにおいて、兌を上にし、巽を下にすれば、澤風大過の卦䷛　となる。さらに前のごとく、一を二に疊み、三を四に疊み、五を六に疊めば、巽の卦となり、兌の卦おのづからその下にあり。こゝにおいて巽を上にし、兌を下に置けば、風澤中孚の卦䷼　となる。またさらに前のごとく疊めば、本の離の三爻の卦とな

る。かくのごとく、疊變するときは、自然に離兌巽大過中孚の五卦を成して、幾返繰り返すも、さらに異ることなし、五にして盡くされるなり。この樣子を、重離六爻偏正回互云々と示されたのである。

もつとも、これは易の道理を深く究めさせるための説示ではなく、たゞ五變するところを喩えに採つて、前に述べた正偏回互、變態窮りなき旨を、明かされしのみである。故に、五というも、その實は五に五を乘じてゆく無數量の五と知ることが、肝要である。

因みに、重離の重は、如の字を佳とす。いかんとなれば、重離といえば、離の卦を重ねる義にして、六爻というもまた然り、左すれば、重離六爻は重説に外ならぬからである。いまこれを前後の文に照して見るも、如臨寶鏡、如世嬰兒、如莖草味、如金剛杵とあれば、こゝでも如離六爻というのが、文章の前後相い一致する。のみならず、義もまたその方が穩當である。

如莖草味　如金剛杵（六語）

この二句について、莖草の味とは、五味子と稱して、一草に五味を具する草の、その味合ということである。また、金剛の杵とは、如來の清淨法界體性智を表したる、眞言宗等にて使用するもので、一金剛に五股を具す法器のことである。この二つの譬えを用い來つて、前段の離の一位に五位を具し、一と五と圓融する旨を再説せるものとの説、古來より甚だ多し、指月老人なども、その説をなしているけれども、これは前來より明かせしところの、如是法の本體、偏正回互宛轉の宗旨を、如臨寶鏡、などのごとく五喩を設けて示されたものと見るを、佳とする。

參じ來り究め來つて認得すれば、前來示す五喩そのものも、如是法の片々である。看よ、拈じ來れば、瓦礫もまた黄金なることを。法には、本來定相なしであ

る。こゝで偏正回互の義を、解し易く圖に示して置こう。

- 偏位―正中偏―空卽是色
- 正位―偏中正―色卽是空
- 回互―正中來―この二位は、彼岸に至る工夫、
  - 偏中至―偏中至は、偏正交々至るといえども、なを偏正の迹あり、兼中到はその迹の見るべきなし。
  - 兼中到―偏正兼帶位―彼岸

正中妙挾　敲唱雙舉（六題）

通宗通途　挾帶挾露（七題）

この四句は、前來寶鏡等の五喩を擧げて、偏正兼帶の妙宗を說き、こゝに來て法に合せしむなり。正中とは、離の正中にして、眞如法性のこと、これを本具の佛心とも、大仙の心とも、如是法とも、寶鏡ともいうのである。この正中よく萬法を包含して、偏頗に墮せざるがゆえに、その趣きを正中妙挾と示されたのである。挾とはサシハサムと讀み、腋の下にかゝえ持つの義にして、他より物を附け添えることになる。吹唱には、この挾の字を叶の字にしてある。叶とはカナウという字なるがゆえに、萬法を包含する義となる。しかし何れにしても、平等の本體と差別の妙用とが、一枚である趣きをあらわされたのである敲唱雙擧とは、樂場において、金石互いに奏するがごとく、師資敲唱して、親密なる樣子のこと、下の二句は、上二句の釋義と見ればよし、すなわち、平等の本體と差別の妙用と挾帶して、宗に通じ、それが挾路して途に通じ、向上向下、接化無方、大寶鏡の無碍自在なる樣子を述べられたのである。

錯然則吉　不可犯忤（七遇）

この二句は、前の正中妙挾の意を承けて、偏頗に墮せず、背觸に渉らざる趣きを、明かされしなり。錯然とは、交錯と敬愼の二義あるも、いまは敬愼の義を用う。すなわち、君は君の位に南面し、臣は臣の位に各々役目を守つて、敬愼なるときは、臣の忠義が上に通じ、君の恩德が下に及んで、君臣道合、師資、父子、主從等の場合においても、また然りである。向上向下、正偏宛轉するゆえに、頭角生せず、圓滿なるがゆえに大吉祥なり。

この正當卽今、犯忤は許されないし、またおのづから犯忤はできぬ。かくのごとく、回互宛轉なるがゆえに、宗に通じ途に通じて、寶鏡の光明は卽處に現成するのである。

天真而妙　不屬迷悟（七遇）

因緣時節　寂然昭著（六語）

細入無間　大絕方所（六語）

毫忽之差　不應律呂

いまこの天眞より律呂までの八句は、前後の錯然として犯忤なき趣きを、述べられた一段である。

吾人本具の眞性は、有無迷悟に墮せず、六凡四聖を超越して、本來無一物、不可思義なりとの意を、天眞而妙、不屬迷悟と示されたのである。わが高祖大師の坐禪儀のはじめにある、道本圓通爭假修證のお示しも、この意である。

このようにしかし、天眞にして妙なりといえども、法は元來因緣所生であれば、

修せざるにばあらわれず、證せざるには得ることなしの道理で、本具眞性の因と、修行功勲の緣と相い契うにあらざれば、佛法は未現前である。そこのところを、因緣時節、寂然昭著と示されたのである。百丈禪師の、佛性の義を知らんと欲せば、應に時節因緣を觀ずべし、時節もし至れば、その理おのづから現前す、と示されたるも、わが高祖大師が、時節因緣の佛性刹那前後に円成、とお示しになつたのも、全くこの意に外ならない。

つぎに、因緣時節が寂然として照著するときは、大小の量を絶して、そのものそれ自體無罣碍である。その點を、細には無間に入り、大には方所を絶す、と示されたのであるが、こゝにおいて、毫忽程も情識分別を交えしことあれば、大寶鏡に契わざるのみか、大寶鏡とは、遙か雲程萬里の隔りとなりて、六律六呂の節奏に應ぜぬことゝなるの意を明かされて、以下の頓漸云々の句を開く端由とされている。

今有頓漸　緣立宗趣（七週）
宗趣分矣　即是規矩（七週）
宗通趣極　眞常流注（七週）
外寂內搖　繫駒伏鼠（六語）

この八句は、前段において、毫忽の差、律呂に應せずといゝし趣きを、述べられたのである。

天眞の妙道は、無間に入り方所を絶して、頓漸の名字を離れるものである。しかるに五祖弘忍の下に二弟子あり、一は慧能、嶺南にあり、一は神秀　嶺北にあり、無所得の法は同一なれども、機に頓漸差別があるゆえに、こゝにおいてか南頓北漸の名稱が起り、遂に頓に學する者は頓の宗趣を立て、漸に參ずる者は漸の宗趣を立

するに至る。すでに宗趣を立するがゆえに、各々そこに頓漸の規矩を用いることになる。そこを宗趣分矣、即是規矩といわれたのである。

ところが、その規矩に陥ちて執着するかぎり、天眞の妙道に體達することはできない。その趣きを、次の四句に述べられ、たとい、宗通じ、趣極まるもなをこれ眞常流注であり、みなこの心地の障害である。その眞常流注の有様を、繫げる駒、伏せる鼠に喩えて、誡しめらたわけである。

先聖悲之　爲法檀度（七遇）
隨其顚倒　以緇爲素（七遇）
顚倒想滅　肯心自許（六語）
要合古轍　請觀前古（七農）

佛道垂成　十劫觀樹（七遇）

これは上の意を承けて、たとい智鏡泯合の境界に達するも、なをこれ繫駒伏鼠の病なりと、先佛先祖方が、その病にかゝれる學人を悲しみたまうて、その顚倒にしたがつて、種々の法施を行い、隨波隨浪、同事行のご苦勞をされ、その結果、學人は顚倒の病を除き去り、本來の面目現前して、そこに安心し、肯心自ら許るすに至るが、こゝにおいてまた謂ゆるの已到住着の病にかゝつてしまう。この已到住着の病は、金鎖の病ともいうて、極めて重い病である。近頃では、參學上この金鎖の病を得る者も少いようであるが、学問の世界において、この金銷の病がだんだん増えて來ている。これも古今の相違で止むを得ないのであろうか。次の四句は大通智勝佛の十劫坐道場佛法不現前の因緣と、釋尊の三七日間の樹下觀樹思惟の因緣とを擧げて、佛においても、その滯果の病のあつたことは思わしめるのであるが、しかし

佛においては、實はかくのごとき病はないのである。けれども、學人にその病多きがゆえに、その肯心自ら許し、百尺竿頭に死漢となつているを悲しみたまい、その病を醫さんとして、自らその病に暫らくかゝられたのである。

如虎之缺　如馬之彝（七週）

この二句は、共に前章において一言せしごとく、肯心自ら許し、佛果に滯つている病に喩えたものである。

虎の缺けたるとは、虎が人を喰えば、その虎の耳には必ず傷を生ずる、かくて傷の多いほど、虎同志間に威力を示すことになる。そのことをいうのである。馬の彝とは、馬の前足の膝上に白毛があり、それを夜目というて珍重するをいうのである。

何れも、大法を得たといゝ、佛果を得たという、滯果の病に喩えられたもので、十劫という長い間、さとりの樹に目を奪われ、守住耽着の病に陥いる學人をして、天眞而妙なる無碍自在の化門を開かしめんとの、すべてこれ大慈悲である。

以有下劣　寶几珍御（六御）

以有驚異　狸奴白牯（七驚）

この四句は、法華經信解品の說喩によつて、向下却來の行持に入る、妙用を伸べられる一段である。

衆生本來天眞而妙の那人にして、正しくこれ長者の一子なれども、知解分別の妄執のために、他國に令蹼し、下劣の身と成り果て、我法の二見に執着し、無碍の妙用を得るに由なし。これら下劣の機を接化せんがため、佛はまづ、寶几珍御、百福莊嚴、萬德圓滿の身を現じたまうも、それでは却えつて、下劣の心に驚異の心を生

じて、獅子王座に近づいて來ぬから、佛はそこで、一切の妙衣を脱して、異類中行、被毛戴角、すなわち、狸奴白牯の身を現じて、應化爲人したもうのである。

まことにこれ、天眞而妙、迷悟に屬せず、物の爲めに則となる、大自在の妙用にして、靈山會上を下つて、鹿野苑に遊びたまう、接化の妙術というべきである。

羿以巧力射中百歩（七遇）
箭鋒相値巧力何預（六御）
木人方歌石女起舞（七麌）
非情識到寧容思慮（六御）

この八句は、前段の應用無碍にして、分別染汚に渉らざる儀を、明かされたものである。

羿はよく射藝に通じ、百歩を隔てゝ雀の目を射たという。また、飛衛と紀昌が弓の名人にありては、巧力の極まるところ、遂に箭鋒相値うて、不〻知不〻識天子の法令に契つたという。何れも手と弓とを相忘れて、巧力の預るところではなかつたのである。法門においてもまた然り、天眞而妙なるところは、修行功勲によつて到れるべきものではない。がしかし、箭鋒相値う妙處に達するには、絶大なる習練を要すること、またいうまでもない。天眞而妙の境地に到る場合においても、實參實究を要すわけである。巧力（相對）と妙絶（絶對）とを並べて、こゝにそのことを示されたのである。

下の二句は、さらに一層情識思量に墮せざる、木人の歌、石女の舞を擧げて、佛の下化衆生である、無方の妙用も、またかくのごとしと示されるのであるが、こゝに到つて、いよいよ全篇の曲調（文章）と寶鏡（そのもの）と相臨む的意を明かさ

れ、下の君臣父子云々の結文を呼び起されるのである。即今、吾人も、日用光中、茶裏飯裏かくのごとく化益してこそ、はじめて寶鏡面の那一人といえるのである。

臣奉於君　子順於父（七鬘）
不順不孝　不奉非輔（七鬘）
潛行密用　如愚如魯（七鬘）
只能相續　名主中主（七鬘）

前段の木人石女の二喩、應機接物自在の妙用を明すについては、至れり盡せりであるが、しかしまだ向上向下回互宛轉の旨を、詳かにしていない。よつてこゝに君子奉順の道を說き來つて、さらにその趣きを一層明了にせられるのである。

臣は君に奉重し、子は父に孝順して、水と水と相和するごとくに、內外融和し、風波起らずして、一國平穩、一家親密なるところが、直ちにこれ、天眞而妙の正道であり、吾人本具の佛心、如是寶鏡の現成である。とのお示しである。

最後の四句、これは說明を要せぬ。讀んで字のごとく明瞭なり、實行のところである。寶鏡三昧一篇の畫龍點睛である。參同契の結文には、謹白參玄人　光陰莫虛度とあつたが、石頭大師がそのように敬意をもつて、謹白の二字を入れられたところを、いま洞山大師は、主中主という風にいわれて、吾等お互いを贊歎されている實に兩大師の慈恩廣大無邊である。吾等何をもつてか報いんとす。主中の主はしばらく置く、潛行密用、如愚如魯の宗旨を會する底、今如何、老衲こゝに恭しく一偈を賦す。

如愚如魯密傳親　世外忘機儘屈伸
八十八年恁麼去　山中無事一閑身

提唱手鏡を拜して

大光圓心禪師御自筆の、參同契、寶鏡三昧提唱手鏡を拜覽するに、一讀、再讀、また三讀して感受したる印象は、まづ第一に、宗乘の極意を毫もその格式曲調をくずすことなく、佛心如是の第一義を端的に提示されてあること、第二には、祖意內容を字句文言と照し合せて、審細、緻密に探究考察せられてあること、第三に、その用語成文極めて簡潔明白にして、全篇の理路整然たる點である。

參同契寶鏡三昧の拈提、提唱、乃至講義、講話等は、古今にわたつて枚擧に暇ないが、今この手鏡に見る三特長は、あらゆる註書に比して遙かに群を抜く活文字である。もしその人を切る寸鐵の短文に接して、その深意を汲み兼ねる人あらば、他の平明な註書を並べ見ることによつて、禪師の提唱が、如何に卓越し、閑文字を避けて、全篇の皮肉骨髓を直露せられてあるかゞ伺われて、深くその眞意に參ずることができるであろう。

なを、二三御自作の偈を附して、原意の幽玄な趣きをそのまゝに、縹渺たる餘韻をもつて、味讀せしめられる懇切な老婆心と、反古紙に毛筆を以つて、丹念に書き記るされた手鏡の原文を拜して、その綿密な家風に對し、限りなき法悅歡喜を覺える次第である。

昭和三十五年一月吉日

監院　佐藤泰舜　謹記

駒澤大學
受入
8030
昭37.7.6

昭和三十五年一月一日発行

【非売品】

著者　熊沢泰禅

発行者　不老閣侍局

発行所　福井県吉田郡志比村
大本山永平寺
不老閣

（古径荘納）